
翼の現世難

夜代衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼の現世難

【Nコード】

N9953G

【作者名】

夜代衣

【あらすじ】

翼が現世へ遊びに行った。そこで出あった少女の悩みを聞き、解決する話。皆の力をかりながら、少女を助ける、翼達。喧嘩等のいろんな要素が盛りだくさんの小説。

現世へ（前書き）

この小説には、残酷なシーン等があるかもしれません。苦手な方は見ないことをおすすめします。

現世へ

桑ヶ谷 翼 クワガダ ヌバサ

零番隊長

斬魄刀 竜火 リョウカ

卍解 竜火斬舞 リョウカザンマイ

現世に遊びに行った俺だった。が、まさかこんなことになるとは・
・誰が予想しただろうか？

現世へ（後書き）

翼は女です。性格・態度が男っぽいです

自殺と出会い

現世の時刻は今PM・10時。寝静まった町で一人の少女が浦原商店に向かっていた。

「浦原の奴、寝てなきやいいんだがなあ。ま・寝てるだろうけど」
浦原商店に向かっていたのは桑ヶ谷翼だ。彼女は特殊義骸に取りに
いつていたのだ。

特殊義骸は、死神のときとほぼ同等の力が出せる。

「うおーい浦原！ここ開けやがれ！」

シャッターを叩く。中から気の抜けた声が聞こえた。

「ふわぁーい。少々お待ちを」

全く何やってんだか下駄帽子め……。そんなことを考えていると
中から浦原が出てきた。

「翼サン、来るんならもうちょっと早く来れませんかねえ……。

眠いんで」

「俺は忙しいから遅くなる・っていつといただろうが。アホ」

「スイマセンね特殊義骸は作るのが大変ですから……。ほら！コレ
です」

見た目は翼そのまんまだ。翼は義骸に入ってみた。

藍色の瞳も黒い髪を後ろにたらし、結ぶところから髪先端15センチ
くらいのとこまでを白い布でグルグルに巻いているところも、
真っ白な肌もそのまんまだ。

右肩の辺りにある、竜の刺青はその白い肌に映える。……。明るい
ときはだが。

翼は夜の町を歩いていた。時刻は11時。さすがに静か過ぎるくら

いのところだった。

ふと上を向くとビルの上になにやら人影を見つけた。間違いなく柵を乗り越えている。

「おいおい・・・自殺だろアレ・・・。仕事増やすなよな」

めんどくさいのかイヤイヤビルに向かった。

ダンッ！と地を蹴りビルの上へ向かう。

少女はビルの上から柵を乗り越え今にも落ちようとしていた。

「お母さん・・・お父さん・・・ごめんなさい」

フラッと少女の体が前に傾く。その瞬間だった。

パシッ！

少女の手をつかんだのは翼だった。

「謝るくらいなら死ぬんじゃないやねえよ馬鹿野郎」

冷静に言う。

「放してよ！放して！あたしはもう死にたいの」

少女が翼の手を振りほどこうと一生懸命だ。そのせいでバランスを崩し、ビルから落ちてしまった。が・翼がもう片方の手でビルの縁をつかんで落下を避けた。

「はっ放して！貴女まで落ちちゃうわ！」

「・・・死なせねえし、俺は死なねえよ」

ニツと笑う。その笑顔に少女はゾクツとした。

翼はぐつと手に力をいれ、いつきにビルの上に入った。

「おい、大丈夫か？」

翼はそつと手を差し出す。少女はその手につかまり立ち上がる。

「ありがとう・・・。でもどうしてあたしを助けたの？」

「俺が・・・死神だから」

少女の顔がひきつる。

「死神？迎えに来たんじゃなくて？」

少女の言葉に翼が少し笑っている。

「死神がいることは否定しねーんだな」

「だってあたし、死神とか天使とか信じてるし、あたし靈感あるから霊とか見えちゃうの。だから・・・ね？」

「死神は魂の調節者なんだ。現世で死した者の魂魄をソウルソサエティに送ったり、ソウルソサエティにいる魂魄を保護するという仕事をするんだ」

少女は先ほどまで自殺しようとした奴とは思えないほど楽しそうだ。

「なあおまえ、名前なんてんだ？」

「あたし？あたしは水波羅　ミスハラユキ 柚季！あなたは？」

「俺は桑ヶ谷　クワガタニツバサ 翼よろしくな」

うん！と柚季はうなずき手を握った。

自殺と出会い（後書き）

水波羅 柚季は黒髪に赤いカチューシャをつけています。
二話目 呼んで頂きありがとうございました。

まさかの再会（前書き）

いまさらですが、夜翼の着ていた服は青い星のマークが入った白いT・シャツに、短パンをベルトで止めただけです。それにブーツと
いうすがたです。

まさかの再会

次の日

空座第一高等学校 1年3組

「なあなあ一護！今日転校生来るって知ってたか？」

黒崎 一護に話しかけているのは浅野 啓吾だ。

そんな啓吾に一護の反応は、

「ああ！？転校生！？んなもん知るかよ！」

今日の彼はご機嫌斜め。それは昨日の晩、夜遅くまで死神業をしていたせいだ、彼は寝不足なのだ。

そのとき一護のクラスメートの井上 織姫と有沢 たつきが話しかけてきた。

「へえ！転校生ねえ。強かったら柔道部誘っちゃおうかなあ」

「もうたつきちゃんったらあ……でも、どんな人が来るんだろう？」

皆でわいわいしていると一護が

「ああ！もううるせーよ！！俺は勉強してんだよ！ボケ！！」
と、その時だった。一護が立ち上がった拍子に、消しゴムが落ちてしまった。

コンッコンッ と音を立てて転がっていく。そしてあるクラスメートの足元まで転がった。

「おい水波羅！ちよつとソレとってくれねーか？」

水波羅……そう、翼が助けたあの水波羅 柚季だ。

「えっ！あつ……コレ？」

おどおどしながら柚季が聞く。

「あーそうそう。ありがとな」

一護に怖いイメージを持っていた柚季はイメージとのギャップにびっくりした。

「あ・・・うつうん！どういたしまして」

そして柚季は自分の席に戻った。

それから3分後

「うおーい！席に着け！転入生紹介するぞ！」

教室に入ってきたのは1年3組担任の越智 美諭がはいつてきた。

「喜べ男ども！はいつてきたのは女子だ！」

うおおおおおおお！！と男子が喜ぶ。

「いやっほうおーい！！！！女子じょしだあゝ！！！！」

人一倍喜んでる啓吾。正直言つてバカだ。

「いよっし！入ってこい！」

越智先生が呼ぶと入ってきたのは・・・

「よろしくな！俺の名前は桑ヶ谷 翼だ！」

その瞬間だった。一護とルキアの表情が変わった。・・・いや、翼のことを知っている

雨竜 織姫 チャドはポカンとしていた。

（何であいつがここに！！）

一護はそう思った。

（あ！・・・あの子だ！）

柚季もそう思ったらしい。開いた口が塞がらないらしい。

「んじゃ桑ヶ谷、お前の席は黒崎・・・あのオレンジ頭の隣だ」

一護を指差して言う。

「チッ！一護の隣かよ・・・」

「ん？なんか言ったか？」

越智先生に問われた翼は

「あーなんでもねー」

超空返事

これからは騒がしくなりそうだ。

まさかの再会（後書き）

3 話め！まだまだ序盤ですから・・・。そろそろ残酷なシーンがあるかも・・・。
それではまた！

昼休み

昼休み

「なんつでおまえがここにいるんだ！ああ！？」

一護が叫ぶ。翼が反論した。

「べつにいいだろおーが！！俺が暇をもてあまして何しようがな！それともなんだあゝてめえもしかして俺が来ると何か問題でもあんのかよ」

一気に教室が騒がしくなる。全員の視線が二人に集まる。

「黒崎君も翼ちゃんもやめてってばあ・・・」

織姫の注意も激しい二人の口喧嘩には敵わない。

「井上さん、聞くわけ無いだろ・・・特に黒崎は」
雨竜があきれた様にいう。

「ムッ・・・確かに・・・」

チャドも同意のようだ。

「おまえらなあ！どっちの味方だよ！」

一護が翼を押さえながら言う。

「ふははははははははは——隙ありい！！」

その瞬間、翼が一護の足を払い壁に投げた。

ドッカアアアアアアアアアン！！！！！！

豪快な音を立てて一護が壁に激突した。

「いつつつつつてええええええええええ！！」

「ああ！黒崎君！」

「気にすんな織姫、メし食おうぜ。」

・・・あつそうだ袖季も一緒に食わねーか？」

突然話をふられた袖季はしどろもどろしながら答えた。

「え！？あの・・・その・・・」

柚季は優柔不断な性格なのですぐには答えを出さなかった。

そんな柚季に翼はイラっとして、

「あーもー！！ハッキリしろってーの！！」

そんな翼にビクっとしてその拍子に答えた。

「ご一緒させて頂きます！！」

なぜ敬語・・・？

そう思った翼は思わず笑ってしまった。

「くくくく・・・あははははははははは！！！！」

それにつられて織姫・ルキア・一護も笑ってしまった。

柚季は恥ずかしそうだった。

「わりわり！まあ屋上いこうぜ」

翼が柚季の手を引く。

「うっうん！」

柚季はとても嬉しそうだ。

く屋上 昼飯中く

「なぜおぬしがいるのだ？翼？」

ルキアがアンパンを食べながら聞く。

「ん？ああそれは零番隊の仕事が一段らくしたからな。後は黒丸と

雪菜に任せればいい。

ここでプロフィール

いさが くろまる
伊坂 黒丸

男

零番隊福隊長

斬魄刀 小金丸 こがねまる

卍解 光鳥小金丸 こうちょうこがねまる

姫野 雪菜 ひめの ゆきな

女

零番隊第三席

斬魄刀 紅花 べにばな

卍解 妖華紅花 ようかへにばな

では小説にもどりましょう

「あの・・・黒崎くん・・・」

袖季が勇気を出して聞いてみた。

「腰についてるその髑髏どくろはなんなの？」

「おまつ！コレが見えんのか！？」

一護が驚きながら聞く。

「うん」

翼はリンゴを食べながら「あー言い忘れてた」と納得したようだった。

「えっ！？てことは水波羅さんって霊力があるってこと？」

織姫はたいそう驚いた顔をしていた。

「そうなの・・・あたし変でしょ？」

今にもなきそうな顔だ。

『全然！！』

全員が声を合わせていった。

「ここに居る者全員霊力があるのだ。だからおかしい事なんて無いぞ」

「くっ朽木さん！いつもとキャラが違うわ！」

「うむ、私はいつもこっちでは流石にこの言葉使いでは変だと思っ

てなあ。

それでキャラを変えていたのだ」

「へえ」

（それを猫かぶりって言っただよ・・・）

一護が心の中で突っ込む。

「まあそれはそれとして本題に入らせてもらっが・・・柚季！お前
なんで

自殺しようとしたんだ？」

あたりが静まり返った。

昼休み（後書き）

キャラ2人追加！黒丸は銀髪に少し灰色が混ざったような色ではねつけ。それが背中（上のほう）まで垂れ下がっている。

原因（前書き）

雪菜の見た目を書くの忘れてました。

銀髪のはね毛 腰まである

瞳の色 黒

原因

「自殺って・・・なんだよ翼!!」

「だまれしゃべんな息すんな」

その言葉に一護は若干キレかけた。

「あの・・・実はね・・・」

昨日 学校から帰ったらいつものソファ―に母の姿はない。

「お母さん?どこ?」

すると、隣の部屋から、

「柚季!ここよーこ」

柚季の家は玄関から入ってすぐがリビング。隣がキッチンなのだ。

「お母さん!今日ね・・・」

いつもどおり学校であったことを話そうとした時だった。

「お母さんが・・・二人いる!!!!???」

一人は胸に鎖が付いている。

もう一人は床で横たわっている。

――血まみれの姿で。

「ぬわぁに言ってるの！母さんは一人よ！」

「でも……でもッ！！」

この複雑な思いは言葉にならない。

「何があつたの？お父さんは？お父さん、今日休みでしょ？ど」

「さぁ……気がついたらもういなかったわ……」

それよりお腹すいたでしょ？何か作るから」

母はキッチンの戸棚に手を伸ばす。

スッ

手は戸棚を通り抜ける。

「え……なに？コレ？」

驚いているのは母だった。

「柚季……なによこれ……私、どうしちゃったの？」

あの死体は何……？」

母が指差すのは母の肉体。

「これ……お母さんだよ。」

柚季の言葉に母は耳を疑った。

「ウン」

母は否定するように思考回路を巡らせている。

いつもの自分

襲い掛かってくる夫

その夫が持っている包丁
ゴルフバット

血

激痛

!!!

「柚季……正直に答えてね……。私は死んだのね」

柚季はただただうなずいた。

「あなたは私が見えるのね」

うなずく

「
・
・
・
・
・
逃げて！！」

そう言った瞬間だった。母の後ろから何かが母を貫いた。

「イ……ツイアアアアアアアアアアアア！……！！！！！！！！！」

自分は無我夢中で家を飛び出した。

そして・・・殺したのは父・・・母もいない
孤独に耐えなくなり、自殺しようとした

「そうゆう訳だったんだね・・・」

織姫は軽くうなずいた。

「私・・・自分でも勝手に足を運んでた・・・。
あの化け物は・・・なんだったの？」

その瞬間全員の表情が険しくなった。

「ホロウか・・・」

「めんどくせえことになったな」

原因（後書き）

そろそろ話のスジが見えてきたかな？もうすぐしたらバトルシーンがあります。乞うご期待！（更新遅くなってますみません）

破面（アランカル）襲撃

「ホロウって何？」

柚季が不思議そうに聞く。

「一言で言つと悪霊だ」

翼が答える。

・・・その時だった。

ズウウウウウウウウウ

「すごい霊圧だ！」

「クソッ！場所はどこだ！翼！」

「落ち着け一護！場所は・・・ココだあ！！！」

そういつた瞬間翼が全員を吹っ飛ばす。

・・・後一步遅れたら全員ホロウの餌食だった。

「バ・・・バケモノオ！！！」

柚季が驚く。

「織姫！」

「わかつてる！」

織姫は柚季の前に立つ。

「雨竜！」

雨竜も柚季の近くに立つ。

「一護！ルキア！いくぜ！！」

翼の合図で三人は死神化する。

「すごい数だな・・・」

ルキアは目の前の光景に息を呑む。

「やるっきゃねーだろ」

一護は斬月の巻き布をほどく。

翼は斬魄刀を抜かずに白打で迎え撃つ。

「くらえ！！白斬撃！！」

白打と斬魄刀を合わせた術で、翼の斬魄刀は炎をまとった力なので、繰り出される技も火をまとっているのだ。

「百火連弾！！」

ばおおおおおおん！！

燃える。

「月牙天衝！！！」

そこにいたホロウが、消えてゆく。

「舞え 袖白雪！！」

初の舞 月白」

氷の柱が立ち上る。ホロウは巻き込まれていく。

「これじゃあきりがない！！」

雨竜が苦虫をつぶしたような表情だ。

「チッ！一護！ルキア！下がれ！！俺が行く！」

翼は斬魄刀を抜いた。

「焼き尽くせ 竜火！！」

熱風

「おらああ！！くらえ！竜火斬！！」

下から上へ刀を振り上げる。すると、いろんな場所から竜が立ち上ってきた。

ホロウたちは、竜火に抵抗することもできずに消えていく。

—— 一瞬のことだった。

「何回見てもスゲー・・・」

一護がつぶやく。

「柚季！終わったぞ」

ルキアが声をかけるが柚季は、

「違う・・・私が見たのとは違う・・・」

「それってどうゆう・・・」

ズウウウウウウウウン

「「「！！！」」」」

「来たみたいだな」

翼が刀を構える。チャリンつと柄の先にある二本の鎖がゆれる。

「なあんだあ？うまそうなにおいがすると思ったら

死神じゃねーか。こいつはうまそうだ」

「アランカル
破面だと！？」

ルキアが目を見開く。

「俺の名はディシールド・ブリディアルだ。よろしくな死神」

「・・・死神代行、黒崎一護だ」

「十三番隊、朽木ルキアだ」

「零番隊隊長、桑ヶ谷翼だ」

「「「よろしくな破面」」」
アラソカル

三人は目つきを険しくする。

「本気で来い死神……死にたくなけりやなあ……！」

アラソカル
破面は刀を抜く。

「天地に吼えろ、白銀野獣」
シルバールフ

アラソカル
解放した破面を見る。

柚季は霊圧に負けて気を失いかけていた。

「じゃあ……本気で行くぜ、卍解！」

一護の足元から霊圧の渦が舞い上がる。

「天鎖斬月」

漆黒の斬魄刀を持った一護が破面を見据える。
アラソカル

「卍解！竜火斬舞……！」

翼の背に巨大な炎の羽と五つに枝分かれた尾。

二つの鎖はそれぞれ火の竜に姿をかえたのだ。

一匹は翼の背

一匹は翼の周りを飛んでいる。

「いくぜ!!」

アランカル
破面に向かってゆく。

二人は動きが早いので、アランカル破面のそばまで一気に近寄った。

破面（アランカル）襲撃（後書き）

アランカル オリキャラを作りましたが・・・白銀野獣シルバールフの能力を余り考えてません・・・なので、是非皆さまのアイデアを募集したいと思います。その中でいいのがあった場合採用させていただくので、それまで更新がちょっとおそくなるかも・・・？

戦い（前書き）

たくさんのご応募ありがとうございました

戦い

そのスピードを見た破面はニイッと笑っていった。
アランカル

「シルバールフ白銀野獣の能力は・・・相手を凍らすことだ!!」

ディシエードはツメを振るう。

「・・・!!雨竜!!あぶねえ!!」

その時だった。攻撃しようとした雨竜が凍り漬けにされた。

「石田君!!」

織姫が柚季を抱えながら雨竜を見る。

「ふははははははは!!みたか!これがシルバールフ白銀野獣の能力だ。
凍り漬けにしたものは二度と元には戻らない・・・俺を倒す以外
にはなあ!!」

ディシエードは響転で雨竜の
ソニード
側へ行く。

「それからもう一つ気をつけな・・・」

ディシエードは足を上げる。

「凍った状態だものすごく壊れやすいんだよ!!」

足を勢いよくおろす。

「三天結盾!!」

ばああああん!!」

三天結盾のおかげで雨竜は無傷だ。

「双天帰盾!!」

雨竜は双天帰盾の光に包まれる。氷が少しずつ解けていく。

「——てめえ……どこ見てんだ？」

一護がディシエードの背後に立つ。

「月牙天衝おお!!」

黒い月牙天衝を放つ。

ブロックスノウ
「氷霰!!」

氷のつぶてが飛んでいく。月牙天衝とぶつかり爆発が起きる。
煙が一護とディシエードを巻き込む。

——そのときだった。柚季が目を覚ました。

「なに?あたし……どうしちゃったの?」

「織姫!ルキア!柚季と雨竜つれてどっか別んどこいけ!!」

「うむ、わかった。気をつけるのだぞ翼!」

ルキアは氷の溶けた雨竜を担いで屋上を出た。

「一護!!」

その時一護が煙の中から現れた。・・・傷だらけで。

「ふふふふ・・・死神もたいしたことねえな」

デিশエードが一護を見る

「一護・・・」

「わりい・・・翼・・・気をつけろ、あいつは・・・本当につええ」
「ああ・・・分かった。後はゆっくりしてくれ」

翼は立ち上がった。上空を飛んでいた竜火が翼の近くに来た。翼が竜火を撫でる。

「おい・・・デিশエード・・・俺が相手だ」

「そこにいる死神のようになりやがれ!!」

デিশエードがツメを向ける。

ブロックスノウ

「氷霰!」

「いけ!! 竜火!!」

一瞬にして霧と化す。

「竜火の力はこんなもんじゃない・・・」

手元に戻ってきた竜火をもう一度デিশエードにぶつける。

「ぐッ・・・おおおおおおお！！！！」

デイスィードはおたけびで炎を払う。

「竜突き！！」

火の竜はストックのように真っ直ぐに突っ込んでいく。
まるで槍のようだ。

アニマルパトラーズ
「氷動物！！」

氷の狼が現れた。

「竜の舞」

火の竜が地面から何匹も現れ狼ごとデイスィードを囲む。

「なんだ・・・これは？」

「舞え竜火斬舞」

——— 焼き尽くせ！！———

火の竜達は一気にデイスィードに突っ込む。すると巨大な火柱が立った。

「いくぜ！デイスィード！おらおらおらあ！！」

ざん！ざざん！！ザシュ！！！！

火柱に向かって刀を振るう。その度に翼の刀には血がこびりついて

いた。

——決まったとおもったが・・・

「!?!」

ざしゅん!?!!

何かが翼の足を貫く。

「なっ・・・!?!」

間一髪 霊圧にきずいて上昇しなかったら間違いなく胸を貫かれていた。

「甘めーんだよ死神^あ」

デイシエードのツメが翼の太ももを貫いていた。

「さあ・・・?それはどうかな?」

翼が刀をデイシエードに向ける。

「・・・竜火!?!」

ばああああああああああん!?!!

火柱が翼ごとデイシエードを包み込んだ。

戦い（後書き）

7話かぁ・・・だいぶいったなぁ・・・。

コレが終わったら新しいのかこうと思うけど・・・
オリキャラとかあれば何でもいいのでおくってー

別れ

「つ…………翼あ!!」

一護が叫ぶ。

「呼んだか一護!!」

火柱の中から翼が出てくる。

「デイスエードは？」

「死んだ」

「…………そうか」

そんな会話をしていると、ルキア・織姫・柚季が入ってきた。

「一護！翼！無事か!？」

「黒崎君も翼ちゃんも怪我してる!!まって!すぐ直すから」

そういつて織姫は手を前にかざす。

「双天帰盾！私は拒絶する!」

二人を暖かな色の光が包む。

「…………ん？ルキア！石田の奴どうした？」

「案ずるな、先に教室に戻っただけだ」

そのとき柚季が心配そうに二人の近くに寄る。

「黒崎君、桑ヶ谷さん大丈夫？」

「ああこのくらいの怪我は日常茶飯事だ」

「いや・・・翼そうじゃないだろ・・・」

ふふふふと柚季が笑う。

「それよりお主ら、正解を解いたらどうなのだ？」

それもそうだな　と一護が正解を解く。

翼も解く。そのとき火の竜は刀に吸い込まれた。

く帰り道く

「にしても柚季！おまえ父さんも母さんもないのに・・・これからどうすんだ？」

翼は心配そうに聞く。

「必要なものだけ持って引越し。すぐそのアパートにね
「そっか」

二人の顔は幸せそうだ。

「・・・もう自殺しようなんて思うなよ？」
「あはははは！もう絶対思いませーん！ー！」

柚季は今まで見たこと無いような笑顔だ。

分かれ道

「じゃあ俺はソウルソサエティに帰えんねーとな」

その時だった。

『翼』

二人の男女の声が重なる。

「ん・・・？黒丸！雪菜！」

黒丸と雪菜が翼の背後に立つ。

「え・・・？なに？この人達」

柚季は軽く首をかしげる。

「あら？翼、そのこは？」

雪菜は翼に問う。

「柚季だ」

黒丸の表情が変わった。

「・・・なるほど・・・まあいい、帰えんぞ」
「・・・おう」

翼は柚季を振り返る。

「じゃあな！柚季！……また・な」

翼は黒丸と雪菜につずいてソウルソサエティに帰った。

「ありがとう……桑ヶ谷さん」

柚季はボソッとつぶやいた。

別れ（後書き）

次で最後！！それまでお付き合いしてください

それぞれの気持ち

「ソウルソサエティ」

「あのコ・・・倅様とおんなじ名前だったわね」

雪菜が自分の前を歩く翼に声をかける。

「ああ・・・そうだな」

翼は足を止めた。

「だから・・・あいつのことほっとけなかったんだよ」
「もしほっといたら慎様が怒りそうだな」

黒丸が苦笑いしながら言う。

倅様——とは、翼の姉で、実の夫に殺された。
慎様——とは、翼の兄で、部下をかばって死んだ。

翼が天を仰ぎ見る。

「あいつ・・・元気でやってんのかな」

翼は思わず太陽の光の眩しさに目を細める。

「きっと元気よ。あっちにはルキアと一護もいるし・・・心配ないわ」

雪菜は翼の小さいのに大きな物を背負っている背中を、頼もしげに見つめた。

「だな！」

翼はいつもの明るい口調で返事をし、また歩きはじめた。

く現世く

「なあ一護……」

ルキアが押入れから聞く。

「んだよ……」

一護はみるからに機嫌が悪そうだ。

「柚季の奴……前と変わったな」

「ああ そういやそうだな……なんつーか明るくなったな」
「うむ……これならもう大丈夫だろ」

「なあルキア、結局翼に聞き忘れたんだが……あいつ、仕事してんのか？」

「ああ見えてもしておるぞ。あやつは仕事のスピードが尋常ではないからな」

「へえ」

妙に納得した一護だった。

く 柚季 く

「ふう！引越し終了！」

棚に飾ってある写真に向き合った。

「母さん・・・あっちでは元気にしてる？あたし・・・頑張るからね」

それぞれの場所でそれぞれの気持ちを抱え、1日が終わっていった。

完

それぞれの気持ち（後書き）

慎↓倅↓翼 左のほうが歳上

いままでありがとうございました。
あたらしい小説をこれからも書きます。応援宜しく！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9953g/>

翼の現世難

2010年10月13日15時09分発行